

卒業生による活動報告

海外で文化遺産
保護活動

2000年度資格取得

嶋田 紗千

はじめに

人との出会いは不思議なもので、まさか自分が海外で文化遺産保護活動に協力することになるとは想像もしていませんでした。

子どもの頃から絵画を見ることが好きで、美術史を学んで学芸員になることを中学生の時に決めました。美学美術史学科ではさまざまな時代や地域の美術に触れ、充実した日々を過ごすなか、西洋美術史、特に東ローマ（ビザンティン帝国）と西ローマの文化が融合した地域に関心を抱きました。もっと深く学びたいと思い、ビザンティン美術史を専門に研究できる岡山大学大学院へ進学しました。

人との出会い

ちょうど私が入学した年に、恩師の鐸木道剛先生（すずきみちたか、元・岡山大学教授）が久しぶりにセルビアの修道院を訪れ、帰国後にその話をされたのがセルビア美術に関心をもったきっかけです。ギリシアとイタリアの間にあるセルビアは旧ユーゴスラヴィアの一つで、1990年代内紛が起こり、長い間渡航が困難でした。2001年に治安が改善されたと知り、ぜひ直に聖堂装飾を見てみたいと思いました。すると、留学したらよいという話になり、翌年ユーゴスラヴィア共和国政府給費生としてベオグラード大学哲学部美術史学科で研究することになりました。当時、日本からの留学生はまだ少なく、推薦者がいれば奨学金がもらえる状況でした。3年間の留学中（2002-2005年）に国名は「セルビア・モンテネグロ共和国」へと変わり、2006年以降は「セルビア共和国」となりました。21世紀初頭は国政が大きく変化する時期

でした。

午前中セルビア語コースに通い、午後は専門の講義や教会スラヴ語を学びました。すべての単語は分からないながらも中世美術について現地の研究者の見解を知ることができました。長期の休みには友人と一緒に山奥の修道院を長距離バスとヒッチハイクで巡りました。ちょうど留学している時期に鐸木先生が共立女子大学の木戸雅子先生と現地の研究者と一緒にヤシュニヤ修道院のフレスコ画の修復と研究をはじめ、視察に同行させていただきました。いつか自分もこのようなプロジェクトを行い、セルビアに恩返しできたらよいと漠然と思いました。

帰国後は岡山大学で修士号を取得し、博士課程に進学したと同時に群馬県立近代美術館で働くことになり、その後、世田谷美術館、多摩美術大学で学芸員として務めました。美術館では展覧会の準備だけではなく、絵画や彫刻の修復に立ち合うことがあり、修復家からさまざまな話を聞くことができてとても刺激的な日々でした。

研究から離れていてもセルビアについての講演会や展覧会があると誘われて関係は途絶えることはありませんでした。2017年に5年ぶりにセルビアを訪れる機会があり、ベオグラード在住の後輩がコソヴォに一緒に行ってくれることとなりました。それがきっかけで仕事を辞めて、研究を再開することにしました。私が留学していた時期はまだコソヴォの治安が悪く、グラチャニツァ修道院やデチャニ修道院、ベチ総主教座修道院などセルビア中世の最高峰の修道院群（14世紀）を訪れることができませんでした。

2018年に現地の研究者のお陰でコソヴォの修道院に滞在させてもらい、フレスコ画の調査や撮影を行うことができました。夢のような日々でした。その帰りに13世紀の傑作であるソポチャニ修道院へ向かう際、フレスコ画の撮影許可を取るために現地の修復家を鐸木先生より紹介してもらいました。その方から修復への協力を求められ、現地の恩師であるゴイコ・スボティチ先生と鐸木先生に相談して、住友財団に助成を申請しました。同時にセルビアに関わる企業に寄付をお願いしたところ、大日本除虫

卒業生による活動報告

菊株式会社（蚊取り線香の金鳥）が支援して下さることになりました。蚊取り線香に使われる除虫菊はセルビアが原産地なため、ユーゴスラヴィア王国時代から長い付き合いがあります。

中世セルビア王国の美術

ビザンティン美術とは東方正教会の美術を指します。セルビアはビザンティン帝国に支配されていた時期もありますが、12世紀末に中世セルビア王国が成立し、独立正教会（セルビア正教会）を樹立します。そのため、ビザンティン美術の一つに数えられています。

ビザンティン美術史において現存する作例は少ないといわれます。その理由は15世紀半ばにビザンティン帝国が滅亡し、周辺諸国（ギリシア、ブルガリア、マケドニアなど）もイスラーム教のオスマン帝国に支配され、信者が減り、そして聖堂などが破壊されたからです。セルビアも例外ではありません。しかしながら、正教への信仰は継続できたため、聖堂や修道院を守ることができました。

今ではビザンティン美術のモザイク画を見るならギリシア、テンペラ画ならロシア、フレスコ画ならセルビアといわれます。13世紀以降、ビザンティン帝国が衰退し、多くの職人たちがセルビアを訪れて伝統的な絵画技法をもたらし、そして画家を育成したからです。国教となったことで王朝の資金が注がれ、比較的規模の大きな聖堂が建てられ、そして色彩豊かに彩られました。人材、技術、資金が揃うことで14世紀には文化的に最盛期を迎えます。15世紀以降も聖堂は多数建設されますが、規模は小さく、フレスコ画の顔料の質は低く、かつての水準とは比べものになりません。しかし、これらも歴史や文化を語る遺産として大切にされています。

フレスコ画修復プロジェクト

2021年と2022年に二か所の聖堂フレスコ画修復をコーディネートしました。

1件目は2021年にセルビア南西部の都市ノ

ヴィ・パザル（古都ラス）にあるジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院（聖ゲオルグの塔修道院の意）のドラグティン王礼拝堂（13世紀）です。中世セルビア王国ネマニチ朝の創始者ステファン・ネマニャの曾孫にあたるドラグティン王によって建立され、死後、そこに埋葬されました。こういった聖堂を墓所聖堂といい、王朝の歴史を語る際に必ず登場する重要な文化遺産です。

プロジェクトは、約二ヶ月間、4から6名の修復家によって行われました。フレスコ画の洗浄、モルタルに含まれる砂から表面に排出される塩分の除去、小さい剥落部分への補充、剥離しかけた壁への補強、以前の修復時に補充したモルタルの差し替え、落書き等の除去、最低限の着色などが実施されました。プロジェクトの目的は「よりよい状態で将来へ引き継がれること」です。そのため、支持体である壁の保全に多くの時間を注ぎました。過剰な加筆はせず、大きく破損したところはそれ以上剥落しないように抑え、できるだけ中世時代に描かれた状態を再現するという難しい方法を目指しました。そのため、剥落した目や口などは描き足さず、また重力で大きく剥落した天井のヴォールトは固定のみとしました。モルタルに含まれる塩分によって白く霞んでいたフレスコ画は希釈した溶剤で洗浄することでかなり色彩が鮮明になりました。

パンデミックの渦中に実施したために修道院にはほぼ缶詰め状態となり、そのお陰で修復過程をしっかりと視察することができました。また長期滞在できたことで、日々のお祈りの相違が学べ、正教への理解が深まりました。

2件目は2022年に南東部の町レスコヴァツ近くのヴェリキ・クルチミル村にある昇天聖堂（17世紀）で行いました。基本的な工程は同じですが、この聖堂のフレスコ画は煤の汚れを隠すために後世になって油絵具で上塗りされていました。それゆえ、洗浄するのに時間がかかりました。きれいに除去されたことで下に描かれていたフレスコ画の層が現れ、全く違う聖堂に生まれ変わったように感じられました。

これらの活動がセルビア科学芸術アカデミーで認められ、外国人共同研究員となり、また駐日

卒業生による活動報告

セルビア大使から「日本に於けるセルビア美術普及への貢献」で表彰されました。

おわりに

博物館学を学ぶことは、学芸員資格を得るためだけでなく、文化遺産保護の役にも立ちます。私はフレスコ画修復に携わる人々とたまたま知り合って、なおかつ日本の民間企業から支

援が受けられて修復プロジェクトを実施することができました。視野を広く持つことで学んだことを生かす場はあるのではないのでしょうか。

現在、新しいプロジェクトをベオグラード大学の研究者とセルビア正教博物館の学芸員と企画しています。15世紀から19世紀に制作されたイコン（板絵、テンペラ画）45枚の修復を行う予定です。また何かの機会にご報告できれば幸いです。



修復の様子